

平成 18 年度 時間学研究所研究活動報告書

1. 研究所名 (英訳名)	時間学研究所 (Research Institute for Time Studies)			
2. 所長	氏名	辻 正二		
	電話番号	083-932-5976		
	E-mail	tsuji@yamaguchi-u.ac.jp		
3. 研究組織	(4部門 15プロジェクト)			
【部門】 プロジェクト名	研究組織	所属部局(専攻等)・職名)	プロジェクトの研究目的と意義	
【理論的時間研究 部門】	<u>脇條靖弘</u>	人文学部・教授	時間についての認識論的、形而上学的 問題の研究	
	岩部浩三	人文学部・教授	言語の中の時間	
	乾 秀行	人文学部・助教授	言語と文学の時間に関する研究	
【自然的時間研究 部門】	<u>中井 彰</u>	医学系研究科(医) ・教授	マウス個体発生プログラムの中の発 生ステージ依存性遺伝子	
	山本晴彦	農学部・教授	前線・台風による集中豪雨の時間的・ 空間的特性の解析	
	藤島政博	理工学系研究科(理) ・教授	細胞内共生および細胞内寄生成立の 分子機構と真核細胞進化の研究	
	杉野法広	医学系研究科(医) ・教授	卵巣と子宮内膜における血管の新生・ 成熟・退縮の性周期における変化	
	三浦保範	助教授(理工)	炭素の加速器による新しい年代の科 学	
	【社会的時間研究 部門】	<u>石田成則</u>	経済学部・教授	高齢社会における社会的時間の配分 と調整の研究
		寺地信二	経済学部・助教授	経済心理・行動・制度進化
坪郷英彦		人文学部・教授	東アジア少数民族の時間観念の研究	
【応用的時間研究 部門】	<u>中村彰治</u>	医学系研究科(医学系) ・助教授	生物時計と健康な生活	
	松富直利	農学部・教授	卵白アルブミンの熱安定型アルブミ ンへの転換とその生理的意義	
	長 篤志	理工学研究科(理工) 講師	使用者の知覚認知における時間精度 を最適化するマン・マシンインターフ ェイスの開発	
	鶴田良介	医学系研究科(医) ・講師	ICU 入室患者におけるせん妄の新しい 診断法の有用性と危険因子の解析	

部 門 用 (理論的時間研究部門)

4. 研究活動・成果発表状況

- 1) 研究部門別に研究業績、外部資金獲得状況等に基づいて記入してください。
- 2) 総合的な時間学研究及び新しい学際領域創出の観点から記入してください。
- 3) 成果の社会還元の見点から記入してください。

協條靖弘教授研究グループ (時間学基礎論グループ)

1. 著作・論文

入不二基義, 『ウィトゲンシュタイン 「私」は消去できるか』(シリーズ・哲学のエッセンス)、NHK出版、2006年5月30日

入不二基義, 「運命論から何を読み取るべきか」、西日本哲学会編『西日本哲学年報』第14号、pp.129-151. 2006年10月5日

上野 修, 現実性と必然性—スピノザを様相的観点から読み直す, *Actuality and Necessity: Rereading Spinoza from a Modal Perspective*, 哲学, *Philosophy*, No.57, pp.77-92, 2006.4.1, 日本哲学会

木村 武史 「語られた神話—北米北西海岸文化地域ハイダ神話から」篠田知和基編集 『神話・象徴・文化Ⅱ』 楽浪書院 2006年5月 117-134頁

木村 武史 「神話語りの芸術的表象—ハイダの芸術家ビル・リードに見られる

二重の他者性と先住民性」 哲学・思想論集 第32号、25-42頁、2007年3月

木村 武史 「サステナビリティ・スタディーズにおける宗教の位置と問題点」

cSUR メダンアクションスタディ、省力化都市再生ワークショップ4、2006年7月12日、3-23頁

Takeshi Kimura & Leslie E. Bauzon, eds., *The International Surigao Conference on "Cultural Values and Sustainability: Dialogue between Japan and the Philippines,"* August 20 to 21, 2006. *Area Studies Occasional Paper Series No. 3* (March 2007), pp. 1-195.

2. 学会報告

入不二基義, 「運命論(fatalism)について」、専修大学哲学会 2006年度大会、2006年4月23日

入不二基義, 「哲学の誤読 —大学入試問題を素材として—」、東京都高等学校公民科「倫理」・「現代社会」研究会、2006年11月2日

入不二基義, 「時間と論理と運命論」、時間学特別セミナー、2007年3月9日

森野正弘「墮天使のもたらす時間」(山口大学時間学研究所主催:「時間学セミナー~時間学の構築・新たな文理融合を求めて~」2006年8月)

古荘真敬, 「「原因」と「理由」の彼岸への問い」、ハイデガー・フォーラム 第1回大会、於東京大学、2006年9月16日

古荘真敬, 「菊地恵善氏「ニーチェの永遠回帰思想について」への質問」(学会シンポジウムでの特定質問)、西日本哲学会第57回大会、於佐賀大学、2006年12月3日、

古荘真敬, 「物語的な生の救済について」、科学研究費 基盤研究(C)課題番号16602015「なぜ人々は物語なしに生きていけないのか-多メディアの中の物語の発生・展開・終焉」研究グループへのレクチャー発表として、於成城大学、2006年12月14日

◎時間学基礎論セミナー

アラム・ジュマリ「アボリジニの神話と芸術から見る聖なる時間」

於山口大学総合研究棟フォーラム・スペース、2006.8.4

青山拓央「自由意志の非実在性 —時間の流れと偶然について」

於山口大学総合研究棟フォーラム・スペース、2006.10.11

協條靖弘「未来判断と相対主義 --- プラトン『テアイテトス』178a-179bの意義」

於山口大学総合研究棟フォーラム・スペース、2007.3.3

上野修(大阪大学)「出来事の時間—ドゥルーズの『意味の論理学』から」

於山口大学総合研究棟フォーラム・スペース、2007.3.3

【社会的貢献活動】

森野正弘「竹取物語の時間」(平成18年度やまぐち街なか大学主催:連続講座「時間学」2007年1月)

太田聡人文学部教授グループ関係

1)

●『時制とその周辺領域の統語的・意味的研究』<平成15年度~平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書>を出版した(平成18年5月)。掲載論文タイトル等は以下の通り。

(1) 和田学「韓国語受動文の項構造とアスペクト形式-e iss-」pp.1-9.

(2) 岩部浩三「進行形と単純形の意味論」pp.11-27.

- (3) 前田満「感情の should 再考」 pp.29-49.
 (4) Shima, Etsuro “Present and Past Tenses in Future Contexts” pp.51-87.
 (5) 和田尚明「英語の3人称小説における時制解釈」 pp.89-134.
 (6) 今井新悟「従属節『～とき』の時制」 pp.135-145.
 (7) 松谷緑「英語の進行形の発達：その意味と用法」 pp.147-154.
 (8) 太田聡「屈折の具現をめぐって」 pp.155-168.
 (9) 武本雅嗣「フランス語のジェロンディフの『原因』用法をめぐって—日本語のシテとの対照研究—」 pp.169-181.

●その他の研究論文

- (10) 和田尚明「過去分詞の時制解釈のメカニズム」, 筑波大学文芸・言語学系 (編), 『文藝言語研究 (言語篇)』 50, 85-128, 2006年10月31日.
 (11) 和田尚明「定形動詞補部に生じる非定形動詞の時制解釈」, 卯城祐司他 (編), 『言葉の絆』, 開拓社, 397-410, 2006年10月7日.
 (12) 太田聡「2音節の形容詞の比較変化について」, 卯城祐司他 (編), 『言葉の絆』, 開拓社, 31-41, 2006年10月7日.
 (13) Shima, Etsuro “Reducing Pseudogapping to VP Ellipsis,” *English Linguistics*, 日本英語学会 (編), 23.1, 279-308, 2006年6月.
 (14) 岩部浩三 (書評)「Renaat Declerck and Susan Reed, Conditionals: A Comprehensive Empirical Analysis」, 日本英文学会 (編), 『英文学研究』 83, 209-213, 2006年11月20日.

●口頭発表

- (15) 和田尚明「『内』の視点・『外』の視点と時制現象」日本英語学会第24回大会ワークショップ『言語現象の「内」と「外」』, 2006年11月4日 (於：東京大学本郷キャンパス).

この他に、毎週金曜日開催している「山口大学英語学研究会」において、18年度は合計10本の時間に関する研究の口頭発表があった。

●外部資金獲得状況

- ・科学研究費補助金 (基盤研究(B)) に応募したが、残念ながら採択には至らなかった。
- ・(「外部」資金と言えないが、) 人文学部長裁量経費を10万円得て、定例の研究会の運営資金とした。

2)

時間学セミナー#3

日時： 2006年9月14日

場所： 総合研究棟3F・フォーラムスペース

講師： 岩部浩三

演題： 「英語の進行形と単純形について」

5. 自己評価

4. 活動報告・成果発表状況の1)、2)及び3)の観点別に自己評価を記載してください。【自己評価 IV：年度計画を上回って実施している, III：年度計画を順調に実施している, II：年度計画を十分に実施できていない, I：年度計画を実施していない】(該当するいずれか一つに○を付けてください。) その際、その際、自己評価の理由及び当該年度の問題点、改善点を併せて記載するようにしてください。

3グループの総合評価

1) 年度計画を順調に実施している

2) 年度計画を順調に実施している

3) 年度計画を順調に実施している

6. 18年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要

平成18年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要 (5. 自己評価を踏まえて記載してください。)

18年度の計画とそれ以降の計画に分けて記入してください。

研究計画・方法（平成 18 年度）

各プロジェクト毎の研究計画と方法は、継続して研究を継続していく予定である。研究計画や方法は、昨年の研究の継続的研究と新たな知見による研究、そして研究方法を行うことになろう。

18年度は、部門内もしくは部門外のプロジェクトと連携した新たな研究プロジェクトを立ち上げる予定で、この研究計画・方法に関しては未定である。今後に関しては、部門内のセミナーや研究会の実施のなかで、学際的な研究テーマを決めることが、課題になると思われる。

計画通り、年間 18 回の研究会を実施し、その情報を学外に向けてホームページ (<http://iwabe.hmt.yamaguchi-u.ac.jp/linguistics.html>) で発信したほか、研究会発表の内容に基づき、論文を分担者各自 1 本以上、合計 14 本（報告書論文を含む）を発表できた。しかしながら、科学研究費補助金の採択を目指して、更なる研究の推進が必要である。

- ・毎週の研究発表は従来通り継続し、その経過はホームページ上で逐次外部へも情報発信する。
- ・山口大学時間学研究所の他のプロジェクトや分野と連携し、情報交換も密にしながら、学際的領域の新規開拓に努める。
- ・研究代表者は、岩部浩三が大学教育センター長に任命され、激務にあるので、太田聡と交代した。

研究計画・方法（平成 19 年度以降）

各プロジェクト毎の研究計画と方法は、継続して研究を継続していく予定である。研究計画や方法は、昨年の研究の継続的研究と新たな知見による研究、そして研究方法を行うことになろう。

19年度は、部門内の時間に関する研究プロジェクトが始動し、この研究に向かって競争的な原理を駆使して、時間学研究の新たな知見を見出したい。

- ・19年度も科研費の基盤研究(C)で新規応募したが不採択になった。人文学部からの研究特別経費も半減されることになったので、20年度の科研費獲得は必須である。20年度以降の新しい展開を目指して、テーマの設定と計画の立案を行いたい。
- ・毎週の研究発表は従来通り継続し、その経過はホームページ上で逐次外部へも情報発信する。
- ・山口大学時間学研究所の他のプロジェクトや分野と連携し、情報交換も密にしながら、学際的領域の新規開拓に努める。
- ・これまでの研究成果に基づき、講演会や出前講義等による社会還元や教育面での貢献も十分可能になっているが、さらに研鑽を続けたい。

2 - 1

部 門 用（自然的時間研究部門）

4. 研究活動・成果発表状況

- 1) 研究部門別に研究業績、外部資金獲得状況等に基づいて記入してください。
- 2) 総合的な時間学研究及び新しい学際領域創出の観点から記入してください。
- 3) 成果の社会還元の観点から記入してください。

中井 彰医学部教授グループ関係

1. 原著論文

- 1) F. Shinozaki, M. Minami, T. Chiba, M. Suzuki, K. Yoshimatsu, Y. Ichikawa, K. Terasawa, Y. Emori, K. Matsumoto, T. Kurosaki, A. Nakai, K. Tanaka, and Y. Minami. Depletion of HSP90 induces multiple defects in B cell receptor signaling. *J. Biol. Chem.* 281: 16361-16369, 2006
- 2) T. Uchiyama, H. Atsuta, T. Utsugi, Y. Oyama, T. Nakamura, A. Nakai, M. Nakata, I. Maruyama, H. Tomura, F. Okajima, S. Tomono, S. Kawazu, R. Nagai, M. Kurabayashi. Simvastatin induces heat shock factor 1 in vascular endothelial cells. *Atherosclerosis* 188: 265-273, 2006
- 3) N. Hayashida, S. Inouye, M. Fujimoto, Y. Tanaka, H. Izu, E. Takaki, H. Ichikawa, J. Rho and A. Nakai. A novel HSF1-mediated death pathway that is suppressed by heat shock proteins. *EMBO J.* 25: 4773-4783, 2006.
- 4) M. Sakamoto, T. Minamino, H. Toko, Y. Kayama, Y. Zou, M. Sano, E. Takaki, T. Aoyagi, K. Tojo, N. Tajima, A. Nakai, H. Aburatani, and I. Komuro. Upregulation of Heat Shock Transcription Factor 1 Plays a Critical Role in Adaptive Cardiac Hypertrophy. *Circ. Res.* 99: 1411-1418, 2006.

2. 外部資金

- 1) 特定領域研究 2件
- 2) 共同研究 1件
- 4) 基盤研究 1件
- 5) 若手研究 1件

藤島政博理学部教授グループ関係

1) 原著論文

- (1) Kodama, Y., Nakahara, M. and Fujishima, M., Symbiotic alga *Chlorella vulgaris* of the ciliate *Paramecium bursaria* shows temporary resistance to host lysosomal enzymes during the early infection process. *Protoplasma*, **230**, 61-67 (2007).
- (2) Kodama, Y., and Fujishima, M. Infectivity of *Chlorella* species for the ciliate *Paramecium bursaria* is not based on sugar residues of their cell wall components, but based on their ability to localize beneath the host cell membrane after escaping from the host digestive vacuole in the early infection process. *Protoplasma*. in press.
- (3) Nosek, J., Tomaska, L., Bolotin-Fukuhara, M., Miyakawa, I., Mitochondrial chromosome: an insight from analysis of complete yeast genomes. *FEMS Yeast Research* **6**, 356-70 (2006)
- (4) Miyakawa, I., Mitomi, K., Ueda, Y., and Sando, N. A close location of actin patches and mitochondria during sporulation of the yeast *Saccharomyces cerevisiae*. *Cytologia* **71**, 439-445 (2006).
- (5) Murata M, Azuma Y, Miura K, Rahman AM, Matsutani M, Aoyama M, Suzuki H, Sugi K, Shirai M., Chlamydial SET domain protein functions as a histone methyltransferase. *Microbiology* **153**, 585-92 (2007)
- (6) Oda H, Suzuki H, Sakai K, Kitahara S, Patrick MS, Azuma Y, Sugi K, Kitamura, T, Kaye J, Shirai M., Rac1 mediated Bcl-2 induction is critical in antigen-induced CD4 Single positive differentiation of a CD4+CD8+ immature thymocyte line. *J. Leuko. Biol.* **81**, 500-8 (2007)
- (7) Takeuchi H, Nakazawa T, Okamoto T, Shirai M, Kimoto M, Nishioka M, Con SA, Morimoto N, Sugiura T., Cell elongation and cell death of helicobacter pylori is modulated by the disruption of cdrA (cell division-related gene A). *Microbiol Immunol.* **50**, 487-97 (2006)
- (8) Sakai K, Suzuki H, Oda H, Akaike T, , Azuma Y, Murakami T, Sugi K, Ito T, Ichinose H, Koyasu S, Shirai M. Phosphoinositide 3-kinase in nitric oxides synthesis in macrophage critical dimerization of inducible nitric oxide synthase. *J. Biol. Chem.* **281**, 17736-17742 (2006)
- (9) Kosuge M, Kimura K, Kojima S, Sakamoto T, Ishihara M, Asada Y, Tei C, Miyazaki S, Sonoda M, Tsuchihashi K, Yamagishi M, Ikeda Y, Shirai M, Hiraoka, H, Inoue T, Saito F, Ogawa H; on behalf of the Japanese Acute Coronary Syndrome Study (JACSS) Investigators. Sex differences in early mortality of patients undergoing primary stenting for acute myocardial infarction. *Circulation Journal* **70**, 217-21 (2006)
- (10) Yano S, Matsuyama H, Hirata H, Inoue R, Matsumoto H, Ohmi C, Miura K, Shirai M, Iizuka N, Naito K. Identification of genes linked to gefitinib treatment in prostate cancer cell lines with or without resistance to androgen: A clue to application of gefitinib to hormone-resistant prostate cancer. *Oncol Rep.* **15**, 1453-60 (2006)
- (11) Azuma Y, Hirakawa H, Yamashita A, Cai Y, Rahman MA, Suzuki H, Mitaku S, Toh H, Goto S, Murakami T, Sugi K, Hayashi H, Fukushi H, Hattori M, Kuhara S, Shirai M., Genome sequence of the cat pathogen, *Chlamydomonas felis*. *DNA Research* **13**, 15-23 (2006)

2) 国際学会発表

- (1) Yuuki Kodama. Protein Synthesis of symbiotic *Chlorella vulgaris* of the ciliate *Paramecium bursaria* is required to protect the alga from the host lysosomal digestion in early infection process. 7th Asian Ciliate Biology Meeting, Wuhan, China, July 17-20, 2006. Abstract book, p31.
- (2) Koichi Iwatani, Hideo Dohra, B. Franz Lang, Gertraud Burger, Manabu Hori and Masahiro Fujishima. Translocation of an 89-kDa periplasmic protein is associated with *Holospira* Infection. 7th Asian Ciliate Biology Meeting, Wuhan, China, July 17-20, 2006. Abstract book, p28.
- (3) Yoshinao Azuma, Mohd. Akhlakur Rahman, Manabu Sugii, Mutsunori Shirai. Regulation of Host Cell Apoptosis by *Chlamydomonas pneumonia*, The 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress, Kyoto, Japan, June 18-23. 2006.
- (4) Harumi Suzuki, Kouhei Sakai, Takaaki Akaike, Shigeo Koyasu, Mutsunori Shirai. Phosphoinositide 3-kinase in nitric oxides synthesis in macrophage: critical dimerization of inducible nitric oxide synthase, 6th Awaji International Forum on Infection and Immunity. Awaji, Japan. Sep. 1, 2006.
- (5) Yoshinao Azuma, Mohd. Akhlakur Rahman, H. Hirakawa, A. Yamashita, Y. Cai, S. Mitaku, H. Toh, S. Goto, H. Fukushi, M. Hattori, S. Kuhara, Mutsunori Shirai. Genome sequence of *Chlamydomonas felis* and its practical application, The 4th Workshop of COST 855 on Pathogenesis and Diagnosis of Animal Chlamydioses, Edinburgh, Scotland. Sep. 4-5, 2006. (招待講演)

3) 国内学会発表

- (1) 中村欽光、藤島政博. 核内共生細菌ホロスボラの感染によって誘導される宿主パラメシウムの選択的食胞形成. (社) 日本動物学会中四国支部会報, No. 58, p20, 2006 (5月 20-21日、2006年、愛媛大学).
- (2) 児玉有紀、藤島政博. ミドリゾウリムシと共生クロレラの感染成立におけるタンパク質合成阻害剤の影響. (社) 日本動物学会中四国支部会報, No. 58, p20, 2006 (5月 20-21日、2006年、愛媛大学).
- (3) 児玉有紀、藤島政博. クロレラの感染とミドリゾウリムシ食胞内酸性フォスファターゼ活性の出現時期. 第77回日本動物学会予稿集, pp37, (9月 21-24、2006年、島根大学).
- (4) 西嶋綾子、藤島政博. ミドリゾウリムシの共生クロレラは共生クロレラ特異的な細胞壁抗原を発現している. 第77

- 回日本動物学会予稿集、pp37、(9月21-24、2006年、島根大学)。
- (5) 藤島政博、中田景子、児玉有紀。ゾウリムシは核内共生細菌ホロスポラの感染で各種温度耐性を獲得する。第77回日本動物学会予稿集、pp37、(9月21-24、2006年、島根大学)。
- (6) 児玉有紀、藤島政博。感染初期過程でのクロレラのみドリゾウリムシに対する感染能は食胞から脱出したクロレラが細胞表層に定着できるかどうかによって依存する。第39回日本原生動物学会講演要旨集、p12(11月17日-19日、2006年、西九州大学)。
- (7) 西嶋綾子、藤島政博。*Clorella vulgaris*と*C. sorokiniana*はみドリゾウリムシの細胞内に共存できない。第39回日本原生動物学会講演要旨集、p12(11月17日-19日、2006年、西九州大学)。
- (8) 中村欽光、藤島政博。感染型の核内共生細菌ホロスポラは宿主に選択的食胞形成を誘導する。第39回日本原生動物学会講演要旨集、p13(11月17日-19日、2006年、西九州大学)。
- (9) 藤瀬弘子、道羅英夫、藤島政博。核内共生細菌*Holospira obtusa*の侵入先端特異的76kDaタンパク質の性質。第39回日本原生動物学会講演要旨集、p13(11月17日-19日、2006年、西九州大学)。
- (10) Fema Abamo, Hideo Dohra and Masahiro Fujishima. Fates of 63-kDa periplasmic protein of infectious form of endonuclear symbiotic bacterium *Holospira obtusa* during infection process. 第39回日本原生動物学会講演要旨集、p11(11月17日-19日、2006年、西九州大学)。
- (11) 田中健也、道羅英夫、藤島政博。ゾウリムシ核分化過程における新たな大核核小体特異的抗原の出現時期。第39回日本原生動物学会講演要旨集、p12(11月17日-19日、2006年、西九州大学)。
- (12) 宮川 勇、岡室 彰、Jozef Nosek、酵母*Candida parapsilosis*からの新規Abf2様ミトコンドリアDNA結合タンパク質の精製、日本植物学会第70回大会、熊本市、2006年9月13-16日。
- (13) 近藤 航、北川孝雄、赤田倫治、宮川 勇、酵母遺伝子破壊株セットを用いたミトコンドリア形態の網羅的観察、第24回 YEAST WORKSHOP、香川県小豆島、2006年11月16、17日。
- (14) 福永 肇・白井 睦訓。原発性胆汁性肝硬変(PBC)で検出される*Chlamydomonas reinhardtii*について。第80回日本感染症学会総会 学術講演会、感染症雑誌 第80巻 臨時増刊号 P185、東京、4月20-21日、2006年。
- (15) 白井 睦訓・東 慶直・鈴木 春巳、クラミジア感染制御とNO。第6回 日本NO学会学術集会、プログラム・抄録集 p41、東京、5月25-26日、2006年。
- (16) 東 慶直、白井 睦訓、病原性細菌と産業有用細菌の全ゲノム解析。第59回日本細菌学会中国・四国支部総会、日本細菌学雑誌 61, (4) p. 423, 宇部、10月18-19日、2006年。
- (17) 松谷 峰之介、東 慶直、吉岡 里美、小川 基彦、岸本 義男、白井 睦訓、日本紅斑熱の病原菌*Rickettsia japonica*の全ゲノム解析。第59回日本細菌学会中国・四国支部総会、日本細菌学雑誌 61, (4) p. 425, 宇部、10月18-19日、2006年。
- (18) 村田正之、東 慶直、三浦公志郎、松谷峰之介、白井睦訓、クラミジアSETドメインタンパクの機能解析。第59回日本細菌学会中国・四国支部総会、日本細菌学雑誌 61, (4)p. 425, 宇部、10月18-19日、2006年。
- (19) Mohd. Akhlakur Rahman, Yoshinao Azuma, Mutsunori Shirai、Apoptotic Protease Activating Factor-1(Apaf-1)-independent Caspase-9 activation by *Chlamydomonas reinhardtii*, 第59回日本細菌学会中国・四国支部総会、日本細菌学雑誌 61, (4) p. 425, 宇部、10月18-19日、2006年。
- (20) 福永 肇、遺伝子変異による多剤耐性結核菌の発生メカニズム。第59回日本細菌学会中国・四国支部総会、日本細菌学雑誌 61, (4)p. 425, 宇部、10月18-19日、2006年。
- (21) 東 慶直、山口大学における微生物ゲノム解析の動向。第59回日本細菌学会中国・四国支部総会、日本細菌学雑誌 61, (4)p. 425, 宇部、10月18-19日、2006年。
- (22) 酒井幸平、鈴木春巳、小田浩代、赤池孝章、東 慶直、伊藤岳人、一瀬 宏、小安重夫、白井睦訓。PI3キナーゼのクラミジア感染における役割。第24回日本クラミジア研究会・第13回リケッチア研究会合同学術集会、抄録集 p15、抄録集 p15、宇部、10月21-22日、2006年。
- (23) 東 慶直、白井睦訓、クラミジア2菌種の全ゲノム解析。第24回日本クラミジア研究会・第13回リケッチア研究会合同学術集会、抄録集 p28、抄録集 p15、宇部、10月21-22日、2006年。
- (24) SUZUKI Harumi, SAKAI Kouhei, SHIRASAKI Tomoaki, ODA Hiroyo, KITAHARA Seiji, PATRIC S. Michael, GALEAR Philippe, SHIRAI Mutsunori; Functional analysis of Th-POK in T cell development; 第36回免疫学会学術総会、日本免疫学会学術総会記録第36巻172頁、大阪、12月11-12日、2006年。
- (25) ODA Hiroyo, SUZUKI Harumi, BABA Yukari, SAKAI Kouhei, PATRIC S. Michael, KITAHARA Seiji, AIZAWA Shinnichi. SHIRAI Mutsunori; Role of Rac1 in survival of peripheral T cells; 第36回免疫学会学術総会、日本免疫学会学術総会記録第36巻260頁、大阪、12月11-12日、2006年。
- (26) Sakai Kouhei, Kitahara Seiji, Shirai Mutsunori (non-member co-author: Yoshinao Azuma, RAHMAN MOHD. AKHLAKUR); Obstructed NO production from *Chlamydomonas reinhardtii* infected Macrophage; 第36回免疫学会学術総会、日本免疫学会学術総会記録第36巻260頁、大阪、12月11-12日、2006年。
- (27) 東 慶直、杉井 学、平川英樹、ラーマン モハッド、美宅成樹、久原 哲、白井睦訓; クラミジアの封入体膜遺伝子群と真確生物型遺伝子群の解析; 第80回日本細菌学会総会、日本細菌学会誌 62 (1) 60、大阪、3月27日、2007年。
- (28) 東 慶直、杉井 学、平川英樹、ラーマン モハッド、美宅成樹、久原 哲、白井睦訓; クラミジアの封入体膜遺伝子群と真確生物型遺伝子群の解析; 第80回日本細菌学会総会、日本細菌学会誌 62 (1) 121、大阪、3月27日、2007年。
- 4) その他の研究発表など
- (1) 藤島政博、細胞の進化 一細胞内共生による真核細胞の多様化一、シニアサマーカレッジ、平成18年9月1日(金) 9:30~11:30。

- (2) 藤島政博、第 38 回日本臨床分子形態学会特別講演「核内共生細菌ホロスピラの感染と維持の調節機構」、平成 18 年 9 月 30 日
- (3) 藤島政博、理学部ハイライト研究プレス発表会、原生動物の種の保存と教育研究機関への分与機能の維持および岩国市立ミクロ生物館と連携した環境保全恐懼活動の実施。2007 年 1 月 25 日。

5) 特許申請

- ①特願 2006-349873；DNA 断片の製造方法；発明者：藤島政博、水上洋一、殿岡裕樹。
- ②特願 2006-231878；生菌、死菌及び擬似細菌の存在割合判別方法；発明者：白井睦訓、東慶直（出願平成 18 年 8 月 28 日）出願人：国立大学法人山口大学。
- ③特願 2006-260536；薬剤耐性病原微生物の薬剤感受性増強方法、および高度薬剤耐性菌の出現予防方法（出願平成 18 年 9 月 26 日）発明者：白井睦訓、東慶直；出願人：国立大学法人山口大学
- ④特願 2007-95916；LED 使用化膿止め発光装置（出願平成 19 年 3 月 31 日）；発明者：白井 睦訓、東 慶直、武藤正彦、田口常正。

6) 受賞

なし

7) 外部資金獲得状況

- 平成 17～20 年度 科研費基盤研究 (B) 代表者 藤島政博
- 平成 16 年度～18 年度 科研費基盤研究 (C) 代表者 宮川 勇
- 平成 16～18 年度 厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 代表者 白井睦訓
- 平成 17 年度～ 文部科学省知的クラスター創成事業（受託研究）やまぐち・うべ・メディカル・イノベーション・クラスター 代表 白井睦訓
- 平成 18 年度 文部科学省タンパク 3000 プロジェクト 代表 白井睦訓
- 平成 18 年度農林水産省 生研機構「新技術・新分野創出のための基礎研究推進事業」分担 白井睦訓（代表 松下一信）
- 平成 18～19 年度 経産省 地域新生コンソーシアム研究開発事業 代表者 白井睦訓
- 平成 18～20 年度 経済産業省 独立行政法人 製品評価技術基盤機構 NITE バイオテクノロジー分野ゲノム解析部門 代表者 白井睦訓
- 平成 17 年～19 年度 経済産業省 独立行政法人 製品評価技術基盤機構 NITE バイオテクノロジー分野ゲノム解析部門 代表 白井睦訓
- 平成 17 年～20 年度 共同研究 2 件 代表者 白井睦訓

8) その他の研究費獲得

- 平成 18 年度 YU-VBL 研究支援 VBL 萌芽研究 代表者 白井睦訓
- 平成 18 年度 山口大学スーパー研究推進体支援経費 代表者 白井睦訓

山本晴彦農学部教授グループ関係

【研究業績】

- ・山本晴彦・岩谷 潔：2004 年台風 15 号 (MEGI) により東北・北陸地方の日本海沿岸で発生した水稻の潮風害。日作紀、75 (1)、73-81 (2006)
- ・岩谷 潔・山本晴彦：2004 年台風 22 号 (MA-ON) の気象的特徴と伊東市と横浜市で発生した強風災害。自然災害科学、25 (2)、155-163 (2006)
- ・山本晴彦・岩谷 潔：台風に伴う九州・山口地方の平成 16 年産水稻生産への影響と台風 18 号 (SONGDA) により発生した潮風害の実態。日作紀、75 (4)、535-541 (2006)
- ・山本晴彦：2006 年 11 月 7 日に北海道佐呂速報間町で発生した竜巻災害。自然災害科学、25 (3)、403-417 (2006)
- ・山本晴彦・東山真理子・岩谷 潔：2005 年台風 14 号による山口県錦川流域の水害の特徴。気象利用研究、19、1-4 (2006)
- ・山本晴彦・白水隆之：防災士養成の現状と地域防災力向上のための防災士の役割。気象利用研究、19、23-26 (2006)
- ・山本晴彦：農作物における塩害「潮風害」の特徴。日本海水学会誌、61 (2)、110-117 (2007)
- ・山本晴彦・岩谷 潔・白水隆之・土谷安司：2006 年 9 月 17 日に宮崎県延岡市で発生した竜巻災害。自然災害科学西部地区部会報・論文集、31、1-4 (2007)
- ・山本晴彦・岩谷 潔・兼石篤志・古賀敦子：2006 年台風 13 号の気象的特長と風水害の実態。自然災害科学西部地区部会報・論文集、31、5-8 (2007)

【外部資金獲得状況】

- ・奨学寄附金：代表者、財団等の研究助成金 12 件
- ・受託研究：代表者、(独) 農業・食品産業技術総合研究機構、1 件
- ・助成事業：代表者、国土交通省、1 件
- ・山口大学 VBL 教育研究施設：代表者、実用化研究助成プログラム、1 件

【外部機関との連携】

- ・国際共同研究等：東北師範大学都市環境科学学院 (中国)

・国内共同研究等：メディア教育開発センター、香川大学農学部、岩手県立大学総合政策学部、近畿中国四国農業研究センター、和歌山県果樹試験場、福岡県農業総合試験場、長崎県工業技術センター、愛媛県果樹試験場、山口県農業試験場、島根県農業技術センター、香川県農業試験場、静岡県柑橘試験場、山口県農業者大学校等

【特許出願】

- ・特願 2006-272055、樹体生産能力を評価する方法、樹体生産能力を評価するための撮像装置及び樹体生産能力を評価するための演算処理をコンピュータ上で実行するためのプログラム、国立大学法人山口大学、山本晴彦・岩谷 潔・土谷安司
- ・特願 2006-128090、植物葉の水分ストレスを推定する方法及びそのための装置、国立大学法人山口大学、山本晴彦・岩谷 潔・原田陽子
- ・国際出願 PCT/JP2006/325084、樹体生産能力を評価する方法、樹体生産能力を評価するための撮像装置及び樹体生産能力を評価するためのプログラム、国立大学法人山口大学、山本晴彦・岩谷 潔・土谷安司
- ・特願 2007-061225、街路灯、国立大学法人山口大学、岩谷 潔・山本晴彦・兼石篤志

杉野法広医学部教授グループ関係

1. 研究業績

1) 論文発表

1. Nakata M, Sumie M, Murata S, Miwa I, Kusaka E, Sugino N (2007) A case of monochorionic twin pregnancy complicated with intrauterine single fetal death with successful treatment of intrauterine blood transfusion in the surviving fetus. *Fetal Diagn Ther*, 22: 7-9.
2. Murakami A, Nakagawa T, Kaneko M, Nawata S, Takeda O, Kato H, Sugino N (2006) Suppression of SCC antigen promotes cancer cell invasion and migration through the decrease in E-cadherin expression. *Int J Oncol*, 29: 1231-1235.
3. Sugino N (2006) Roles of reactive oxygen species in the corpus luteum. *Animal Science Journal*, 77: 556-565.
4. Nawata S, Murakami A, Torii M, Nakagawa T, Sueoka K, Takeda O, Suminami Y, Nakamura K, Kato H, Sugino N (2006) Different expression patterns of intact forms of squamous cell carcinoma antigens between normal and malignant cervical squamous : nondenaturing polyacrylamide gel electrophoretic analysis. *Onco Reports*, 16: 399-404.

2) 国際学会発表

1. Sugino N. Angiogenesis in the human corpus luteum. The International Ovarian Conference (Yokohama, 5.13, 2006, 招請講演).
2. Tamura H, Matsuoka A, Yamagata Y, Sugino N. Changes in blood flow in the human corpus luteum throughout the menstrual cycle and during early pregnancy. The International Ovarian Conference (Yokohama, 5.13, 2006).
3. Sugino N. Oxygen radical mediated signaling pathway activated during decidualization or progesterone withdrawal in human endometrial stromal cells. The 12th International Dederation of Placenta Associations Meeting (Kobe, 9.6-9, 2006, Symposium).
4. Takiguchi S, Matsuoka A, Yamagata Y, Tamura H, Sugino N. Increased lipid peroxide levels and decreased superoxide dismutase expression in the decidua of failed pregnancy. The 12th International Dederation of Placenta Associations Meeting (Kobe, 9.6-9, 2006, Workshop).
5. Tamura H, Matsuoka A, Yamagata Y, Sugino N. Study of uterine blood flow throughout the menstrual cycle and during early pregnancy. The 12th International Dederation of Placenta Associations Meeting (Kobe, 9.6-9, 2006).
6. Tamura H, Taniguchi K, Sugino N. Pathophysiological features of thin endometrium. The 62nd annual meeting for American Society for Reproductive Medicine (Neworleans, 10.21-25, 2006).
7. Taniguchi K, Tamura H, Sugino N. Changes in blood flow in the human corpus luteum throughout the menstrual cycle and during early pregnancy. The 62nd annual meeting for American Society for Reproductive Medicine (Neworleans, 10.21-25, 2006).
8. Sugino N. Altered DNA methylation status in uterine leiomyomas. The 16th Lake Shirakaba Conference (Grenada, 12.6-7, 2006, 招請講演).

2. 外部資金獲得状況

- ・平成 18 年度科学研究費補助金 (若手研究) 田村博史 “卵の質の低下に関与する因子の解明：活性酸素やメラトニンは卵の質にどのように影響するのか”
- ・平成 18 年度科学研究費補助金 (若手研究) 山縣芳明 “ゲノム 2 次元電気泳動法による子宮筋腫特異的なゲノム変化の同定”
- ・奨学寄附金 (詳細は非公表) 杉野 法広

三浦保範理学部助教授グループ関係

1. 原著論文 (CD-ROM で発表)

Miura Y., Formations of calcium-carbonates by natural and artificial impacts. LPI Contribution No.1338. ISBN No 1540-7845, LPI, USRA-USA, 論文番号 1277, 2007*.

Miura Y., Shock metamorphism of explosions at the Hiroshima and Nagasaki atomic bombs in Japan: carbon mixed from atmosphere. Proc. ICEM2006 in Yamaguchi. Aug.28-Sept.1., 論文番号 056, 2006*.
Miura Y., Material evidences of catastrophe at the end of Permian Period: carbon deposition of terrestrial carbon cycle system. Proc. ICEM2006 in Yamaguchi.
Miura Y., Impact growth as element cycles at early planetary formation. Workshop on Early Planetary Differentiation: A Multi-Planetary and Multi-Disciplinary Perspective (LPI, USA), 論文番号 4051, 2006*.
Miura Y., Extra-Martian origins of C, Fe, Ni, S and Cl elements to form deposits as local cycle system on Mars. Workshop on Martian Sulfates as Recorders of Atmospheric-Fluid-Rock Interactions (LPI, USA), 論文番号 7001, 2006*.
Miura Y., Spherules of carbon with iron elements found in Asteroids. Workshop on Spacecraft Reconnaissance of Asteroid and Comet Interiors (Tokyo), 論文番号 3008, 2006.
Miura Y., Carbon and nitrogen elements on the Moon for exploration and living resources. Workshop on Science Associated with the Lunar Exploration Architecture, Tempe, Arizona (USA), 論文番号 1, 2006*.
Miura Y., Carbon in material cycle: Formation of carbon deposition by atmosphere. explosions. Proc. 39th ISAS Lunar & Planetary Symposium (Aug. 7, Japan)., 論文番号 31, 2006*.
Miura Y., Carbon cycles on the Meteorites, Mars and the Moon. Proc. 39th ISAS Lunar & Planetary Symposium (Aug. 7, Japan). 論文番号 30, 2006*.

2. 著書 (分担執筆)

Miura Y., Excursion guide book of ICEM2006, Sept.1, Circulation system and current problems at Akiyoshi Cave and Akiyoshi Plateau., 11-16, ISEM Japan (Yamaguchi), Ube, Yamaguchi, Japan, 2006 年

3. 総説・解説・評論・書評等

三浦保範, 最初の山口地学会の入会の思い出: 秋吉巡検. 山口地学会誌: 山口地学会 40 年の歩み, ISSN 0289-9787, (57), 140-140, 2007*

4. プロシーディングス

Miura Y., Material concentration processes of the Polar Regions on Earth. Proc. Intern. Symp. of Asian Collaboration in IPY 2007-2008., NIPR, SCJ(Tokyo), 138-139, 2007*.

Miura Y., Spherules of carbon with iron-nickel elements formed by shock wave explosions.. Second Hayabusa International Symposium - Itokawa Sample Analyses (Takeda Hall, Univ. Tokyo), July 12-14, Univ. Tokyo, 49-50, 2006*.

Miura Y., Material evidences of catastrophe at the end of the Permian Period: Carbon-rich spherules with Fe and Ni.. Antarctic Meteorite XXX(30th, NIPR (Tokyo), 69-70, 2006*.

Miura Y., Geology, petrology and mineralogy of Takamatsu impact crater in Japan. Antarctic Meteorite XXX, NIPR (Tokyo), 71-72, 2006*.

Miura Y., Carbon contents of Nio meteorite and Hiroshima atomic bomb explosions in atmosphere of the Earth.. Antarctic Meteorite XXX, NIPR (Tokyo), 73-74, 2006*.

Iancu G., Miura Y., Kurat G., and Brandtstaetter F, Shock effects and petrologic features of Ohaba chondrite.. Proc. International Conference on Impact Cratering in the Solar System (Netherlands), ESLAB, Netherland, 100-102, 2006*.

5. 学会活動等 研究発表 (アブストラクト集ありの場合)

Miura Y., Shocked quartz and corona texture at Takamatsu buried crater, Int. Mineral. Assoc. Abstract Vol. ISBN 1348-6543, , , 112-112, 2006 年 7 月

Miura Y., Spinodal crystallization from impact glasses of labradorite feldspars., Int. Mineral. Assoc. Abstract Vol., Kobe ISBN 1348-6543, , , 163-163, 2006 年 7 月

三浦保範, ペルム紀末期試料中の炭素・鉄ニッケル球粒粒子とその成因, 地球惑星科学関連学会 2006 年合同大会 (CD ; G147-001), 2006, , 01-01, 2006 年 5 月

三浦保範, 高松/香川地域における埋没破壊孔の石英とカリ長石の衝突急冷コロナ組織の研究, 地球惑星科学関連学会 2006 年合同大会 (CD ; K104-001), 2006, , 01-01, 2006 年 5 月

三浦保範, 山口市仁保のグローバル開発, 国際開発学会、第 7 回大会 (山口)、報告論文集, , , 109-112, 2006 年 6 月

三浦保範、高山和喜、佐々木進, 生命化学進化物質の衝撃波の影響の研究: 球状物質, 衝撃波シンポジウム (九州大学), , , 313-314, 2007 年 3 月

Miura Y., Crater analyses of multiple maps of Earth and its application to extraterrestrial surfaces. , ISPRS IV/9: Extraterrestrial Mapping Workshop- Advances in Planetary Mapping 2007 (Texas, USA)., 1, , 21-21, 2007 年 3 月

三浦保範, 秋吉台石灰岩の走査電子顕微鏡解析, 日本地質学会 2006 年秋季講演会予稿集 (高知大学), , , 158-158, 2006 年 9 月

三浦保範, 月面における岩石と地球飛来岩石の特徴と探査, 地球惑星科学関連学会 2006 年合同大会 (CD ; P232-012), , , 1-1, 2006 年 1 月

三浦保範, 炭素含有炭酸塩鉱物の探査., 太陽系シンポジウム (ISAS, 2006 年度), , , 10-13,

6. 特許や情報データベース等の知的財産の形成

知的財産の形成 パルスレーザーによる物質生成法 (特許), Miura Y. (三浦保範), 2006 年度

<p>知的財産の形成 パルスレーザー照射による炭素の固定方法（知的財産創作届）, Miura Y.（三浦保範）, 2006年度</p> <p>7. 研究ノート等 三浦保範, 炭素の循環経路の時間学的研究（Time-related study of carbon circulation process）。. 山口大学時間学研究所報告者（印刷中）, 1(), 10-14, 2007.</p> <p>8. 分担執筆 雑誌等に掲載の場合 三浦保範、佐々木進, スペースプラズマ報告書, 研究発表、研究成果論文, 5-8, 宇宙科学研究本部, 神奈川県, 2006年</p> <p>9. 活動報告書 高柳雄一、三浦保範, 「宇宙と人間」（宇宙に関わる文明と科学—山口）, 山口における宇宙との関わり, 14-14, 公開講座実行院長、山口メセナ倶楽部, 山口市, 2006年</p> <p>10. 教科書、啓発書、一般書 著書 三浦保範, 夏休みジュニア科学教室、第18回, カラーのサイエンス, 109, 36-40, 夏休みジュニア科学教室実行委員会（宇部日報社）, 宇部, 2006年</p> <p>11. 新聞・一般雑誌への掲載論文または掲載記事等 「宇宙と人間：山口」, サンデー山口、中国新聞、, 20字, 2006年12月2日, 原稿執筆者 新聞記者</p>
<p>5. 自己評価 4. 活動報告・成果発表状況の1)、2)及び3)の観点別に自己評価を記載してください。【自己評価 IV：年度計画を上回って実施している, III：年度計画を順調に実施している, II：年度計画を十分に実施できていない, I：年度計画を実施していない】（該当するいずれか一つに○を付けてください。）その際、その際、自己評価の理由及び当該年度の問題点、改善点を併せて記載するようにしてください。</p>
<p>3グループの総合評価</p> <p>1) 年度計画を順調に実施している それぞれのグループで年次計画と関連した研究が進展している。本年度は、研究所として時間学セミナーを継続的にいい交流を図った。一方で、部門の中のグループ間で討論する場を設けることはできなかった。</p> <p>2) 年度計画を順調に実施している</p> <p>3) 年度計画を順調に実施している</p>
<p>6. 18年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要 平成18年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要（5. 自己評価を踏まえて記載してください。） 18年度の計画とそれ以降の計画に分けて記入してください。</p>

研究計画・方法（平成19年度以降）

部 門 用（社会的時間研究部門）

4. 研究活動・成果発表状況

- 1) 研究部門別に研究業績、外部資金獲得状況等に基づいて記入してください。
- 2) 総合的な時間学研究及び新しい学際領域創出の観点から記入してください。
- 3) 成果の社会還元の見点から記入してください。

【共著書】

辻正二・山本努・稲月正『現代の社会的学解読』2006年、学文社
 石田成則(共編著)『保険進化と保険事業』2005年5月慶應義塾大学出版会 354頁
 高橋征仁(原純輔・片瀬一男・ほか全8名)『青少年の性行動—わが国の中学生・高校生・大学生に関する第6回調査報告』、2006年11月、日本性教育協会
 高橋征仁(片瀬一男、阿部晃士と分担執筆)『社会統計学』、2007年3月、放送大学振興会

【学術論文】

辻正二「大都市定年退職者たちの退職意識と自我意識」『文学会志』(山口大学人文学部)第57巻 179-203頁、2007年3月
 辻正二「退職準備者たちの退職後の時間意識と健康——退職準備者たちの75歳危機について——」『時間学研究』(山口大学時間学研究所)第1巻 43-62頁、2007年3月
 辻正二「都市における生涯現役社会プログラムとリーダー養成」『地域特性をふまえた生涯現役プログラムに関する評価研究』票和18年度厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業総括研究報告書(主任研究者 高野和良) 61-85頁
 三浦典子「産業都市におけるコミュニティ再生の可能性」『西日本社会学会年報—特集 環境と都市』(西日本社会学会)第4号、35-46頁、2006年4月
 三浦典子・辻正二「東アジアプロジェクト研究中間報告—東アジアの若者の高齢者意識と社会意識」『東アジア研究』(山口大学大学院東アジア研究科)第5号、2007年3月
 石田成則 年金改革後の老後所得保障 週刊 社会保障 第2387号(2006年6月)46~49頁
 石田成則 確定拠出年金の現状と課題 みずほ年金レポート 第70号(2006年11月) 14~27頁
 石田成則 確定拠出年金における投資教育と運用商品選択 信託研究奨励金論集 第27号(2006年12月)1~25
 石田成則 保険事業におけるイノベーションの経済的帰結生命保険論集 第157号(2006年12月)131~152
 横田尚俊「都市再開発ブームにゆれる現代都市」大久保武・中西典子編『地域社会へのまなざし』文化書房博文社、2006年、46-70頁
 横田尚俊・浦野正樹「災害とまちづくり」岩崎信彦・矢澤澄子監修『地域社会学講座3 地域社会の政策とガバナンス』東信堂、2006年、103-118頁
 高橋征仁「青少年のメディア接触と性行動—携帯電話、インターネットの普及と青少年の性行動との関連」、17-2頁、2006年11月、第50回日本=性研究会議抄録集、日本性教育協会
 高橋征仁「非行観の発達の生成と時代的変容—類縁化アプローチによる縦断的データの分析」205-229頁、2007年3月、山口大学文学会志、57巻、山口大学文学会
 鍋山祥子「地域高齢者福祉政策と市民の介護意識」『地域社会の変動と社会計画』(中央大学社会科学研究所)2007年3月
 鍋山祥子「未婚化が家族ケアに与えるインパクト—いま、なぜ、ワーク・ライフ・バランスが求められるのか—」『時間学研究』63-76頁 2007.3
 鍋山祥子「別居子による老親ケアと地域福祉力」『東アジア研究』1-17頁 2007.3

【学会報告】

三浦典子「日本における企業フィランソロピーの変容」第112回日本社会分析学会、2006年12月
 辻正二「時間の社会学の構成と課題」日本社会分析学会特別講演
 辻正二「現代社会における社会的速度と時間感覚」第112回日本社会分析学会、2006年12月
 辻正二「社会的時間の研究とその可能性」第1回時間学セミナー2006年7月
 辻正二「なぜ時間研究への関心が低いのか：時間政策の貧困」第2回時間学セミナー2006年8月
 辻正二「台湾・高雄市の視察報告：高雄市の高齢者行政と高齢者施設運営」第14回山口地域社会学会 2007.3.3
 石田成則 経済学における時間 時間学研究所セミナー2006年7月
 石田成則 公私年金の国際的潮流 第26回 日本年金学会 シンポジウム・総会
 2006年11月
 石田成則 リスク・ファイナンスの新動向と技術革新の経済的含意 福岡大学「保険事業のイノベーション研究会」2006年11月
 石田成則 年金プランにおけるリスク・シェアリング—橋大学「保険ワークショップ」2007年2月
 高橋征仁「非行観の類縁性—発達の生成と時代的変容」、2006年5月、64回西日本社会学会
 高橋征仁「山口県青少年データの時系列的分析—類縁化アプローチの基礎視角」、2006年7月、山口地域社会学会。
 高橋征仁「道徳意識の生成と変容—山口県青少年調査データにおける類縁性の変化」、2006年9月、第47回日本社会心理学大会。
 高橋征仁「非行観における類縁化作用—発達の生成と時代的変容」、2006年10月、79回日本社会学会大会
 高橋征仁「青少年におけるメディア接触と性行動」、2006年11月、第50回日本=性研究会議
 鍋山祥子「別居子にとっての地域福祉力—遠距離介護調査の結果から—」2006.6.11. 第20回 日本地域福祉学会大会

【外部資金獲得】

辻正二、研究分担者、厚生労働科学研究費補助金、政策科学推進研究事業、研究代表者 高野和良

<p>小谷（三浦）典子、研究代表者、文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（c） 1件 石田成則 財団助成金 1件 高橋征仁、研究代表者文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）、 1件 平成17年度－平成19年度 高橋征仁、研究代表者、 財団助成金1件、2005-2006年度</p> <p>坪郷英彦グループ (1)著書・論文 貴州省工芸コウゲイ雑感 単著 平成18年11月20日 げんりゅう 第22巻4号所収 源流社発行 3－8頁 生活改善運動を要因とした関東山地及び周辺地域の居住習俗変化の実証的研究、単著、平成16-18年度科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書、平成19年3月31日、1-63頁 (2)学会や研究会の発表 中国貴州省苗族族の工芸的資源の活用について、単独発表、第53回日本デザイン学会研究発表大会、平成18年6月 「展示学」から見た展示学研究の分析、第25回日本展示学会研究大会シンポジウム「最近の展示を総括する」パネラー、平成18年6月25日 (3)講演など</p>
<p>5. 自己評価 4. 活動報告・成果発表状況の1)、2)及び3)の観点別に自己評価を記載してください。【自己評価Ⅳ：年度計画を上回って実施している、Ⅲ：年度計画を順調に実施している、Ⅱ：年度計画を十分に実施できていない、Ⅰ：年度計画を実施していない】（該当するいずれか一つに○を付けてください。）その際、その際、自己評価の理由及び当該年度の問題点、改善点を併せて記載するようにしてください。</p>
<p>1) 年度計画を順調に実施できている 共同研究を実施して、時間学研究の優れた業績をだすまでには至っていない。</p> <p>2) 年度計画を十分に実施できていない</p> <p>3) 年度計画を十分に実施できていない</p>
<p>6. 18年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要 平成18年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要（5. 自己評価を踏まえて記載してください。） 18年度の計画とそれ以降の計画に分けて記入してください。</p>
<p>研究計画・方法（平成18年度） 18年度の研究は、社会的時間の研究のなかで、退職準備教育が加齢とともにどのような影響を及ぼすかという一つの知見を得ることができた。つまり、高齢者のなかで退職前準備教育の経験者と非経験者を比較すると、退職前準備者は、退職後の初期段階ではスムーズな退職生活に入るが、70歳代になると「老人になった」と認める者が増加し、75歳になると非経験者に比べると健康度が落ち、「生涯現役」のタイプが減少するというものである。 時間調整の研究を進めていくためには、向老期、退職前の準備期、前期高齢期、後期高齢期、さらには老人線そのもの考え方を明確にする作業。 そして、それらのサイクルの時間帯とそこに移行するタイミングについての分析。 18年度は、部門内もしくは部門外のプロジェクトと連携した新たな研究プロジェクトを立ち上げる予定で、この研究計画・方法に関しては未定である。今年に関しては、部門内のセミナーや研究会の実施のなかで、学際的な研究テーマを決めることが、課題になると思われる。</p>
<p>研究計画・方法（平成19年度以降） 各プロジェクト毎の研究計画と方法は、継続して研究を継続していく予定である。研究計画や方法は、昨年の研究の継続的研究と新たな知見による研究、そして研究方法を行うことになろう。 19年度は、部門内の時間に関する研究プロジェクトが始動し、この研究に向かって競争的な原理を駆使して、時間学研究の新たな知見を見出したい。</p>

部 門 用 (応用的時間研究部門)

4. 研究活動・成果発表状況

- 1) 研究部門別に研究業績、外部資金獲得状況等に基づいて記入してください。
- 2) 総合的な時間学研究及び新しい学際領域創出の観点から記入してください。
- 3) 成果の社会還元の見点から記入してください。

1) 中村彰治医学部教授グループ関係

1)

研究業績

1. J. Ishikawa, A. Ishikawa and S. Nakamura: Interferon- α reduces the density of monoaminergic axons in the rat brain. *NeuroReport*, 18: 137-14, 2007.
2. A. Ishikawa and S. Nakamura: Ventral hippocampal neurons project axons simultaneously to the medial prefrontal cortex and amygdala in the rat. *J Neurophysiol.*, 96: 2134-2138, 2006.
3. A. Fujioka, T. Fujioka, Y. Ishida, T. Maekawa and S. Nakamura: Differential effects of prenatal stress on the morphological maturation of hippocampal neurons. *Neuroscience*, 141: 907-915, 2006.
4. A. Ishikawa, Y. Kanayama, H. Matsumura, H. Tsuchimochi, Y. Ishida and S. Nakamura: Selective REM sleep deprivation impairs the maintenance of long-term potentiation in the rat hippocampus. *Eur. J Neurosci.*, 24: 243-248, 2006.
5. Y. Sakata, T. Fujioka, H. Endoh and S. Nakamura: In vivo optical recordings of synaptic transmission and intracellular Ca^{2+} and Cl^{-} in the superior colliculus of fetal rats. *Eur. J Neurosci.*, 23(6): 1406-1416, 2006.
6. Y. Liu and S. Nakamura: Stress-induced plasticity of monoamine axons. *Front. Biosci.(Review)*, 11: 1794-1801, 2006.
7. Araki, R., Nakahara, M., Fukumura, R., Takahashi, H., Mori, K., Umeda, N., Sujino, M., Inouye, S.-I.T. and Abe, M., An identification of genes that express in response to light exposure and express rhythmically in a circadian manner in the mouse suprachiasmatic nucleus, *Mol. Brain Res*, 1098: 9-18, 2006.
8. Masumoto, K.-h., Nagano, M., Takashima, N., Hayasaka, N., Hiyama, H., Matsumoto, S.-i., Inouye, S.-I.T. and Shigeyoshi, Y., Distinct localization of Prokineticin 2 and Prokineticin receptor 2 mRNAs in the rat suprachiasmatic nucleus, *Eur. J Neurosci*, 23: 2959-2970, 2006.
9. Matsuno, H., Inouye, S.-I.T., Okitsu, Y., Fujii, Y. and Miyano, S., A new regulatory interaction suggested by simulations for circadian genetic control mechanism in mammals, *J Bioinform Comput Biol*, 4: 139-153, 2006.
10. Numano, R., Yamazaki, S., Umeda, N., Samura, T., Sujino, M., Takahashi, R.-i., Ueda, M., Mori, A., Yamada, K., Sakaki, Y., Inouye, S.-I.T., Menaker, M. and Tei, H., Constitutive expression of the Period1 gene impairs behavioral and molecular circadian rhythms, *Proc Natl Acad Sci, U. S. A.*, 103: 3716-372, 2006.
11. C. Li, S. Suzuki, Q. Ge, M. Nakata, H. Matsuno, S. Miyano, Structural modeling and analysis of signaling pathways based on Petri net, *J Bioinform Comput Biol*, 4(5), 1119-1140, 2006.
12. M. Nagasaki, R. Yamaguchi, R. Yoshida, S. Imoto, A. Doi, Y. Tamada, H. Matsuno, S. Miyano, T. Higuchi, Genomic data assimilation for estimating hybrid functional Petri net from time-course gene expression data, *Gen Informat*, 17(1), 46-61, 2006.
13. A. Doi, M. Nagasaki, K. Ueno, H. Matsuno, S. Miyano, A combined pathway to simulate CDK-dependent phosphorylation and ARF-dependent stabilization for p53 transcriptional activity, *Gen Informat*, 17(1), 112-123, 2006.
14. H. Matsuno, C. Li, S. Miyano, Petri net based descriptions for the systematic understanding of biological pathways, *IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications, and Computer Sciences*, E89-A(11), 3166-3174, 2006.
15. C. Li, Q. Ge, M. Nakata, H. Matsuno, S. Miyano, Modelling and simulation of signal transduction in an apoptosis pathway by using timed Petri nets, *J Biosci*, 32, 113-127, 2007.
16. R. Okada, M. Sugii, H. Matsuno, S. Miyano, Machine learning prediction of amino acid patterns in protein N-myristoylation, *Lecture Notes in Bioinformatics 4146 (2006 Workshop on Pattern Recognition In Bioinformatics (PRIB'06))*, 4-14, Springer, 2006.
17. Sakata Y, Fujioka T, Endoh H, Nakamura S, In vivo optical recordings of glutamatergic and GABAergic synaptic transmission in the superior colliculus of fetal rat, 16th Biennial Meeting of the international Society for Developmental Neuroscience, Abstract Book, 212, 2006.
18. Laskar MS, Mahbub MH, Yokoyama K, Inoue M, Harada N. Factors associated with contraceptive practices of married women in Bangladesh with respect to their employment status *Eur J Contracept Reprod Health Care*. 11(3):220-7. 2006.
19. Mahbub MH, Inoue M, Yokoyama K, Laskar MS, Ohnari H, Suizu K, Inagaki J, Takahashi Y, Harada N Assessment of room temperature influence on finger blood flow response induced by short-term grasping of vibrating handle. *Int Arch Occup Environ Health*, 79(1):22-26, 2006.
20. N Harada, Diagnosis of vascular injuries caused by hand-transmitted vibration Diagnosis of injuries caused by handtransmitted vibration - 2nd International workshop. Book of abstracts, pp30-31, 2006.
21. MH Mahbub, M Inoue, K Yokoyama, Y Takahashi, T Akebi, K Tanigawa, J Mizota, N Harada Finger blood flow responses in glabrous and nonglabrous skin induced by vibration exposure while grasping a vibratory handle 14th Japan Conference on Human Response to Vibration, Book of abstracts, pp99-109, 2006.
22. Y Takahashi, N Harada A consideration of an evaluation index for high-level low-frequency noise by taking into

account the effect of human body vibration. 12th International Meeting on Low Frequency Noise and Vibration and its Control, Book of abstracts, 18-20, 2006.

23. S Shirono, T Aramaki, T Wakui, N Harada Fatigue among female agricultural workers associated with their life style 16th International Congress of Agricultural Medicine and Rural Health, Book of abstracts, pp208, 2006.
24. Bin Wang, K Kuroki, HM Marzub, K Omura, N Harada Evaluation of vibrotactile perception thresholds among patients with hand-arm vibration syndrome: A preliminary report. 第77回日本衛生学会総会、日本衛生学雑誌雑誌、62巻(2号): 720、2007年3月.
25. 井上慎一、やわらかな生命の時間、秀和システム、2006.
26. 井上慎一、土日も定時に「一瞬」起きる、日経ビジネスア ソシエ、第5巻10号 44-45、2006
27. 井上慎一、時間の謎、時間とは何か、ニュートンプレス、86-131、2006
28. 中村 彰治、富士岡 隆、戸部 郁代：ストレスに耐える脳、耐えられない脳-脳の発達とストレス脆弱性、脳21, 9(4): 9-13, 2006.
29. 中村彰治. 妊娠期のストレスが母子に与える影響, 第18回産業神経・行動学研究会, 特別講演、名古屋, 2006年11月

科研費などの外部資金の獲得状況

1. 松野浩嗣：特定領域研究1件
2. 井上慎一：受託研究1件
3. 原田規章：
 - 1) 平成18年度厚労省委託研究（代表） 1件
 - 2) 平成18年度文科省科学研究費基盤研究B（代表） 1件
 - 3) 平成18年度文科省科学研究費基盤研究C（分担） 2件
 - 4) 平成18年度文科省科学研究費基盤研究C（分担）

2)

3)

社会貢献

井上慎一

2006.4.13 脳の中にある時計、生物時計、 防府市健康研修、防府市保健センター

2006.7.14 生物時計、 産業技術センターサイエンスカフェ、セントコア山口

2006.10.1 生命の時間 街中大学 時間学講座、 大殿公民館

2006.10.20 ヒトは遅い生物 産業技術連携推進会議 知的基盤部会計測分科会 招待講演、セントコア山口

2006.12.6 子供の睡眠が危ないー早寝早起きの大切さ 美祢市厚保中学校保健会、厚保中学校

2007.2.1 生体リズムと睡眠 萩むつみ中学保健会、サンライフ萩

2006.12.15 いのちの時間には人間の希望がある、ビッグイシュー、63巻16-17

2007.3.24 とりあえず明日、中日新聞 朝刊38面

松野浩嗣：連続講座「時間学」 ～時間学とは何か(II)

第4回平成19年2月11日(日)14:00~16:00

「時間と空間を越える機械「コンピュータ」：その歴史と今」

中村彰治：時間学研究所学術講演会、シンポジウム講演、ストレスと時間、2007年1月13日

2)松富直利農学部教授グループ関係

1)

研究業績

論文

- 1) Matsudomi, N., Ito, K., and Yoshika, Y., Preventive Effect of Egg Yolk Phosvitin on Heat-Insolubilization of Egg White Protein and Its Application to Heat-Induced Egg White Gel. *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry*, 70, 836-842 (Apr., 2006)

- 2) Ito, K., Seri, A., Kimura, F., and Matsudomi, N., Site-specific glycosylation at Asn-292 in ovalbumin is essential to efficient secretion in yeast. *Journal of Biochemistry*, 141, 193-199 (Feb., 2007)

その他

- 1) 松富直利：鶏卵中の高度リン酸化蛋白質による甘味蛋白質ソーマチンの熱凝集の抑制と蛋白質凝集抑制剤の探索。日本食品化学振興財団第12回研究成果報告書、12: 110-114 (Dec. 2006)

国際学会

- 1) Matsudomi, N., Kimura, F., Ito, K.: The role of N-glycosylation of ovalbumin expressed in yeast. 3th Food Protein Symposium. Yamaguchi, Japan (Aug. , 2006)

- 2) 伊藤一成*, 木村扶季子, 松富直利 酵母発現系を用いたオボアルブミンのN型糖鎖の役割の解明(ポスター) 3rd Food Protein Symposium (Food Scientist Congress in Pacific Basin) 山口 (2006年8月)

- 3) Ito, K*, Kimura, F, Matsudomi, N. The Asn-292 residue in ovalbumin is a critical N-glycosylation site for the secretion in *Pichia pastoris*. (poster) Pichia Protein Expression Conference 2006. San Diego, USA (Oct., 2006)

国内学会

- 1) 伊藤一成*, 瀬利亜紀子, 松富直利 タンパク質品質管理機構における鶏卵白アルブミン(OVA)の糖鎖の重要性(口頭) 2006年度 日本農芸化学会中四国支部第15回講演会 松江 (2006年5月)
- 2) 中嵩志*, 伊藤一成, 松富直利 鶏卵白アルブミンのタンパク質間相互作用に及ぼすSH基の役割(口頭) 2006年度 日本農芸化学会中四国支部第15回講演会 松江 (2006年5月)
- 3) 石丸隆行*, 伊藤一成, 松富直利 鶏卵白アルブミン(OVA)のS化機構の一考察 ~脱アミド~(口頭) 2006年度 日本農芸化学会中四国支部第15回講演会 松江 (2006年5月)
- 4) 伊藤一成*, 木村扶季子, 松富直利 品質管理における鶏卵白アルブミンの糖鎖の役割(口頭) 2006年度 日本農芸化学会中四国支部大会 松山 (2006年9月)
- 5) 中嵩志*, 伊藤一成, 松富直利 鶏卵白アルブミンのタンパク質間加熱相互作用に及ぼすSH基の役割(口頭) 2006年度 日本農芸化学会中四国支部大会 松山 (2006年9月)
- 6) 石丸隆行*, 伊藤一成, 松富直利 鶏卵白アルブミンのS化の一考察(口頭) 2006年度 日本農芸化学会中四国支部大会 松山 (2006年9月)
- 7) 木村扶季子*, 伊藤一成, 松富直利 鶏卵白アルブミンのAsn-292への部位特異的グリコシル化は、酵母での分泌に必須である(口頭) 2006年度 日本農芸化学会中四国支部第17回講演会 高松 (2007年1月)
- 8) 中嵩志*, 伊藤一成, 松富直利 鶏卵白アルブミンの加熱凝集に及ぼすSH基の役割(口頭) 2006年度 日本農芸化学会中四国支部第17回講演会 高松 (2007年1月)
- 9) 石丸隆行*, 伊藤一成, 松富直利 鶏卵白アルブミン(OVA)の熱安定化機構の一考察(口頭) 2006年度 日本農芸化学会中四国支部第17回講演会 高松 (2007年1月)
- 10) 伊藤一成*, 木村扶季子, 松富直利 タンパク質の品質管理における鶏卵白アルブミンの糖鎖の役割(口頭) 2007年度 日本農芸化学会大会 東京 (2007年3月)

研究助成金

奨学寄付金：1件、共同研究：1件

その他(特筆すべき事項)

伊藤一成：2006年度日本農芸化学会中四国支部学生奨励賞(2007年2月)

松富直利：山口県食品開発推進協議会(会長)(2007年3月~)

松富直利：内部に詰め物を有する透明食材及び製造方法(特許 2006-246247)

2)

3)

社会貢献

主催：日本農芸化学会中四国支部

テーマ：市民フォーラム「未来を拓く農芸化学」~食と健康~

- ・香の安らぎ効果とギャバ受容体
- ・かつお節に見る伝統食品の知恵と栄養
- ・機能性脂質のメタボリックシンドローム予防作用

開催日：2007年2月3日

対象者：市民

会場：山口大学大学会館大ホール

参加者：約60名

世話人：松富直利

3) 長 篤志工学部講師プロジェクト関係

1)

研究業績

*久長 穰, 刈谷 丈治, 三池 秀敏, 山口大学における統一認証の導入事例について. 学術情報処理研究, (10), 55-62, 2006.

*Risumon H SIANIPAR, Atsushi NOMURA, Atsushi OSA, Hidetoshi MIIKE, The Two Coupled FitzHugh-Nagumo Equations Establish Multistable System Applied for Smooth Image Segmentation. The Institute of the Electronics, Information and Communication Engineers Transaction, E0, 1-8, 2007. (印刷中)

*Risumon H SIANIPAR, Atsushi NOMURA, Atsushi OSA, Hidetoshi MIIKE, Stochastic Resonance on Discrete FitzHugh-Nagumo System to Realize Visual Functions in Noisy Environment. The Institute of the Electronics, Information and Communication Engineers Transaction, E0, 1-12, 2007. (印刷中)

三浦 一幸, 治部 成記, 長 篤志, 三池 秀敏, 空間フィルタ速度計測法による動作の特徴抽出・認識. 電子情報通信学会論文誌, D0, 1-11, 2007. (印刷中)

*Atsushi Nomura, Makoto Ichikawa, Risumon Sianipar, and Hidetoshi Miike, Vision Systems, Reaction-Diffusion Algorithm for Vision System, 1-20, International Journal of Advanced Robotic Systems, Vienna, 2007 (印刷中・著書)

*Ichikawa, M., Seki, J., Wang, S., Higgins, M. (2006). Visual volume and height of food affect our appetite, Kansei Engineering International, 6, 13-20.

*木下武志, 篠原久美子, 森上あゆみ, 一川誠, 北原真冬. (2006). 理数系科目と連係するベーシックデザイン教育用課題の考案とその学習効果, 感性工学研究論文集, 6, 19-26.

- *Ichikawa, M., Masakura, Y., & Munechika, K. (2006). Dependency of illusory motion on directional consistency in oblique components, *Perception*, 35, 933-946.
- *Ichikawa, M., & Masakura, Y. (2006) Auditory stimulation affects apparent motion. *Japanese Psychological Research*, 48, 91-101.
- *Ichikawa, M., & Masakura, Y. (2006) Dependency of the manner to integrate depth cues on perceptual tasks. *Journal of Vision*, 6, 345a.
- *Ichikawa, M., & Masakura, Y. (2006) Manual control of the visual stimulus reduces the flash-lag effect. *Vision Research*, 46, 2192-2203.
- *三池秀敏, BZ反応における化学反応波が誘起する流体现象のメカニズム. 数理解析研究所講究録, (1496), 103-109, 2006.
- *Nomura, A., Ichikawa, M., Miike, H., Disparity estimation from stereo images with multilayered reaction-diffusion models of activation-inhibition. 2006 IEEE International Conference on Acoustics, Speech, and Signal Processing, 2006 IEEE, 509-512, 2006.
- *野村厚志, 一川誠, 三池秀敏, 自己抑制型反応拡散方程式による画像処理・コンピュータビジョンへのアプローチ. 第 12 回画像センシングシンポジウム, 画像センシングシンポジウム, 413-419, 2006.
- *三池秀敏, 長篤志, 杉村 敦彦, 時間・空間的な照明の変化を伴う環境下での物体運動におけるオプティカルフロー抽出, 情報処理学会研究報告(第 157 回 CVIM 研究会 CVIM 1-1), 0919, 6072, 61-68, 2007 年 1 月
- *Yousuke Honda, Kazumi Nagata, Atsushi Osa, Hidetoshi Miike, A DRIVING SIMULATOR REALIZING VISUAL PERCEPTION-MODIFICATION OF APPARENT SIZE IN LANDSCAPE IMAGE-. IWAIT 2007, a, 1-5, 2007
- *田口淳司, 長篤志, 三池秀敏, 非線形振動子としてのロウソクの炎の挙動 II, 非線形と共同現象研究会 (2007)
- *中村有紀, 長 篤志 木下武志, 三池秀敏, 3 次元コンピュータ・グラフィックスを用いた多視点画像における心理効果, 第 8 回日本感性工学会大会 (2006)
- *古河真弓, 三浦一幸, 長 篤志, 三池秀敏, 感動詞による感情音声を対象とした特徴解析と音声合成の可能性, 第 8 回日本感性工学会大会 (2006)
- *一川誠. (2007). Single mudsplash による変化盲と刺激運動. 日本視覚学会冬季大会, 東京工業大学.
- *一川誠, 政倉祐子. (2006). 能動的観察と視聴覚刺激の同時性. 日本心理学会, 福岡国際会議場.
- *中野伶奈, 木下武志, 一川誠. (2006). 平面図形の配色による立体感:色相の影響について. 日本感性工学会, 早稲田大学.
- *Fukagawa, T. & Ichikawa, M. (2006). Influences of the other's existence on the psychological time estimation in visual cognition tasks. Asian Conference on Vision, Kunibiki Messe, Matsue, Japan.
- *Ichikawa, M. & Masakura, Y. (2006). Dependency of the flash-lag effect on the active control of the stimulus. Asian Conference on Vision, Kunibiki Messe, Matsue, Japan.
- *Morikawa, T. & Ichikawa, M. (2006). Impression formation in viewing real objects and their 2D images. Asian Conference on Vision, Kunibiki Messe, Matsue, Japan.
- *Nagata, K., Osa, A., Ichikawa, M. & Miike, H. (2006). Comparison of perceived scene and perspective image in terms of the apparent vanishing point. Asian Conference on Vision, Kunibiki Messe, Matsue, Japan.
- *Shikina, Y. & Ichikawa, M. (2006). Sex differences in the impression formation and change blindness in viewing photographic images. Asian Conference on Vision, Kunibiki Messe, Matsue, Japan.
- *Shinohara, K., Kinoshita, T. & Ichikawa, M. (2006). Effects of lateral bias in the brightness on the visual balance of two-dimensional graphics. Asian Conference on Vision, Kunibiki Messe, Matsue, Japan.
- *Toya, D. & Ichikawa, M. (2006). Aesthetic and perceptual effects of disparity size in stereogram observation. Asian Conference on Vision, Kunibiki Messe, Matsue, Japan.
- * 一川誠, 西村好古. (2006). 動画像と音楽の再生速度が視聴覚刺激の時間知覚に及ぼす効果. 日本基礎心理学会, 広島国際大学.
- * Ichikawa, M., & Masakura, Y. (2006). Dependency of the manner to integrate depth cues on perceptual tasks. Vision Sciences Society, Hyatt Convention Center, Sarasota, USA.

<特許>

発明者: 三池秀敏、長篤志、本田洋介、長田和美、特願 2007-810、画像生成方法、画像生成プログラム及びシミュレータ

2)

3)

成果の社会還元の見点

著書: 一川誠, 池上彰. (2006). 大人になると、なぜ 1 年が短くなるのか? 宝島社. 東京.

ラジオ出演: 一川誠, 吉田照美のやるき MANMAN、文化放送、2007

4) 鶴田良介医学部附属病院講師プロジェクト関係

1)

研究業績

鶴田良介: ICUにおけるせん妄評価法 (CAM-ICU). 日集中医誌; 14: 229-30, 2007

鶴田良介, 藤本憲史, 金田浩太郎, 小田泰崇, 井上健, 笠岡俊志, 前川剛志: 日本版 CAM-ICU を用いた ICU でのせん妄評価の取り組みと将来への可能性. 日集中医誌; 14: 202, 2007

平成 18 年度科学研究費 基盤研究 (C)

2)

時間学研究および学際領域創出の見点からは未だコメントできない.

3)

社会貢献

日本における「人工呼吸中の鎮静ガイドラインの作成」に貢献する。作成委員の一員。

5. 自己評価

4. 活動報告・成果発表状況の1)、2)及び3)の観点別に自己評価を記載してください。【自己評価 **Ⅳ**：年度計画を上回って実施している、**Ⅲ**：年度計画を順調に実施している、**Ⅱ**：年度計画を十分に実施できていない、**Ⅰ**：年度計画を実施していない】(該当するいずれか一つに○を付けてください。) その際、自己評価の理由及び当該年度の問題点、改善点を併せて記載するようにしてください。

4 グループの総合評価

1) 年度計画を順調に実施している

成果が未だ十分に上がっていないプロジェクトもあるが、部門全体としては順調である。**長篤志工学部プロジェクトグループ**：学会発表および論文執筆についても着実に成果が上がっている。人間の時間的特性に適切に対応したユーザーインターフェイス構築のための基礎知識が蓄積されつつある。外部資金に関しては、これまで積極的に挑戦しているものの、ほとんど獲得できていないのが現状である。ひきつづき、積極的にチャレンジしていきたい。

2) 年度計画を順調に実施している

総合的な時間学研究及び新しい学際領域を創出する具体的な実績はでていないが、その基礎となる成果は着実に上がっている評価される。**長篤志工学部プロジェクトグループ**：人間の知覚認知および感性情報処理における時間的特性や時間的限界についての理解をマン・マシンインターフェイスなどの開発につなげるという学際的試みが着実に成果をあげつつある。これまで以上に他分野との交流を深め、さらに学際的研究の可能性を追求したいと考えている。

3) 年度計画を順調に実施している

プロジェクト間に差が見られるが、部門全体としては十分な実績を上げたと評価される。**長篤志工学部プロジェクトグループ**：研究成果をテレビやラジオ、出前講義などで紹介することによって、この分野の研究の応用における意義を広めるとともに、人間自体の理解を深める基礎研究としての意義もアピールしている。講演やラジオ、テレビへの出演の依頼もコンスタントにあるため、それなりに社会にアピールできているものと思われる。

6. 19年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要

平成19年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要(5. 自己評価を踏まえて記載してください)
19年度の計画とそれ以降の計画に分けて記入してください。

研究計画・方法（平成 19 年度）

各プロジェクトの研究計画と方法は、継続して研究を継続していく予定である。研究計画や方法は、昨年の研究の継続的研究と新たな知見による研究、そして研究方法を行うことになろう。なお、4) 鶴田良介医学部附属病院講師プロジェクトは、今年度は当部門のプロジェクトとしての継続を辞退している。

19年度は、部門内および新たな立ち上がった時間学研究所のメイン研究プロジェクトと連携して研究を行なう予定である。研究計画・方法に関してこれまでの研究内容を継続していくと同時に、新しい方向性が見出された場合は、新たに研究計画・方法を立案する。

長篤志工学部プロジェクトグループ

これまで、人間の時間的特性および時間的制約に対応した情報環境を開発するために、様々な知覚認知心理学的実験や感性科学的研究を実施してきた。引き続き、人間の時間的特性を理解することを通して、情報環境の改善を試みることに意義があると考えている。

これまでの研究では、視覚刺激、聴覚刺激それぞれの処理の時間的特性と制約について整理した。また、強く注意を惹きつける視覚刺激が提示された際の見落とし現象の時空間的特性についても理解が深まった。今後も、このような現象の基礎にある人間の知覚認知情報処理過程についての理解を深め、知覚認知過程を促進することにより様々な課題におけるパフォーマンスを向上させるインターフェイスの基本条件や、見落としの回避を可能にする諸条件を特定することにより、見落としに関わるヒューマンエラーを押さえるための条件の整理を進める計画である。

観察の能動性、刺激と観察者との相互作用により知覚認知の時間的促進に関する検討では、パーソナルコンピュータを用いて視聴覚刺激を提示する。観察者がコントロールするマウスの位置によって刺激の諸属性を変化させる。観察者が操作する刺激やそれ以外の刺激の諸属性（形状、明るさ、色、位置など）の変化に対する反応時間を測定する。刺激の運動方向や変化する視野内位置によって能動的観察の促進効果がどのように変化するかを明らかにする。実験結果から、能動的観察が認知情報処理を最適にする条件を特定する。

見落としに関しては、ディスプレイ上に提示される刺激の諸属性（運動方向、相対的運動速度、位置など）に対応して見落としの頻度やその時空間的特性がどのように変化するかを明らかにする。刺激の諸属性と見落とし頻度との対応関係から、基礎にある認知情報処理系の特定を行なう計画である。

その他、刺激運動の速度が刺激の時空間的特性についての知覚におよぼす効果、表情から感じ取られる感情に与える影響について調べる実験を行なう計画である。また、知覚認知課題を実施する際の作業空間の諸特性が時間評定に及ぼす効果について検討する計画である。

研究成果を日本国内の学会や国際学会などで公表するとともに、論文としても発表し、この分野の時間学研究所の進捗状況が外部からも見て取れるようにしたい。また、一般社会に向けても、機会を見つけて人間の時間的特性についての啓蒙を積極的に進めていきたい。

これまでのところ、十分な外部資金が獲得できていない状態である。科研費を中心に、外部資金の獲得についても積極的にチャレンジする予定である。

研究計画・方法（平成 19 年度以降）

各プロジェクト毎の研究計画と方法は、継続して研究を継続していく予定である。研究計画や方法は、昨年の研究の継続的研究と新たな知見による研究、そして研究方法を行うことになろう。

19年度は、部門内の時間に関する研究プロジェクトが始動し、この研究に向かって競争的な原理を駆使して、時間学研究所の新たな知見を見出したい。

7. 研究所の企画による活動

<研究活動>

時間学研究（機関誌） 創刊号

〔論文、解説〕

井上慎一 生命の速度と現代の危機：ヒトの時間は進みが遅い

杉野法広 卵巣と時間

Alam Djumali アポリジニの神話的世界と社会体系に見る時間の聖化：聖なる時間をめぐる宗教的考察

辻正二 退職準備者たちの退職後の時間意識と健康—退職準備者たちの75歳危機について

鍋山祥子 未婚化が家族ケアに与えるインパクト：—いま、なぜ、ワーク・ライフ・バランスが求められるのか

三浦保範 炭素の循環経路の時間学的研究

〔研究ノート〕

矢野大輔・山本晴彦・岩谷 潔 降雨量・気温データベース構築のための気象資料の数値データ化における手法別時間効率の評価

藤澤健太 時間の測定

時間学セミナー

18年7月7日 時間学セミナー#1（山口地区総合研究棟）

井上慎一 時間学研究所教授「広中先生から聞いた話」

石田成則 経済学部教授「消費関数論争と経済学における時間」

中井 彰 医学研究科教授「発生サイクルの中のストレス遺伝子発現のタイミング」

青山拓央 時間学研究所講師「文理融合と唯物論」

中村彰治 医学研究科教授「鬱病と時間」

辻 正二 時間学研究所長「社会的時間の研究とその可能性」

鎌田祥仁 時間学研究所助教授「地質学・古生物学的時間」

脇條靖弘 人文学部教授「時間は出来事の原因となるか」

18年8月11日 時間学セミナー#2（小串地区医学部霜仁会館）

辻 正二 時間学研究所長「なぜ時間研究への関心が低いのか：時間政策の貧困」

大村佳代 医学研究科助手・原田規章 医学研究科教授「社会医学と時間：疫学研究を例として」

森野正弘 東アジア研究科助教授「墮天使のもたらす時間」

18年9月14日 時間学セミナー#3（山口地区総合研究棟）

岩部浩三 人文学部教授「英語の進行形と単純形について」

寺地伸二 経済学部教授「経済学と時間：時間選好率をめぐって」

三池秀敏 工学部教授「新しい科学としての非平衡・非線形科学から見た時間と心の問題」

18年11月30日 時間学セミナー#4（山口地区総合研究棟）

藤沢健太 理学部助教授「あなたの時計、合っていますか？」

高橋征仁 人文学部助教授「携帯電話とインターネットは、青少年の性行動をどう変えたのか？」

特別セミナー

18年12月22日 時間学研究所 特別セミナー（山口地区総合研究棟）

程肇 三菱化学生命科学研究所 時間ゲノム学研究グループリーダー「哺乳類時計遺伝子Periodの機能と発現制御機構」

19年3月9日 時間学研究所 特別セミナー（山口地区総合研究棟）

植村恒一郎 群馬県立女子大学教授「「死」をどのように考えるか —— エピクロスのテーゼを中心に」

入不二基義 青山学院大学助教授「時間と論理と運命論」

部門別セミナー

18年5月26日 応用時間学部門報告会（山口地区総合研究棟）

一川誠 理工学研究科助教授「使用者の知覚認知における時間制度を最適化するマン・マシンインターフェイスの開発」

松富直利 農学部教授「卵白アルブミンの熱安定型アルブミンへの転換とその生理的意義」

井上慎一 時間学研究所教授「生物時計と健康な生活」

〔資料配付： 鶴田良介 医学研究科講師〕

18年8月4日 理論的時間研究部門 基礎論セミナー#1（山口地区総合研究棟）

アラム・ジュマリ 人文学部助教授「アポリジニの神話と芸術から見る聖なる時間」

18年10月11日 理論的時間研究部門 基礎論セミナー#2（山口地区総合研究棟）

青山拓央 時間学研究所講師「自由意志の非実在性」

18年11月22日 社会的時間研究部門 研究会#1（山口地区総合研究棟）

鍋山祥子 経済学部助教授「超高齢社会におけるワーク・ライフ・バランスの必要性」

19年2月8日 理論的時間研究部門セミナー（山口地区総合研究棟）

岡光一浩 山口大学名誉教授「クリムトを「誤読」する —— 『接吻』『ユーディットI』に読む「時間」——」

19年3月3日 理論的時間研究部門 基礎論セミナー#3（山口地区総合研究棟）

脇條靖弘 人文学部教授「未来判断と相対主義 --- プラトン『テアイテス』178a-179bの意義」

上野修 大阪大学教授「出来事の時間—ドゥルーズの『意味の論理学』から」

その他の業績

18年10月 井上慎一 時間学研究所教授が、時間学プロジェクト関連研究の成果を、『やわらかな生命の時間』（秀和システム）として刊行

18年10月 青山拓央 時間学研究所講師が、時間学プロジェクト関連研究において、日本科学哲学会主催「石本賞」を受賞

18年12月 一川誠 理工学研究科助教授／時間学研究所応用時間学部門長（現千葉大学）が、時間学プロジェクト関連研究の成果を、『大人になると、なぜ1年が短くなるのか?』（宝島社）として刊行

<広報活動>

時間学研究所のホームページによる研究所の活動紹介
ニューズレターの発行（2回発行）

<社会貢献活動>

学術講演会

19年1月13日 山口大学時間学研究所 学術講演会『心と時間』（小串地区医学部霜仁会館） 参加者80名

渡辺義文 医学研究科教授「うつ病－養育環境とストレス脆弱性－」

河野荘子 名古屋大学教育発達科学研究科助教授「非行少年と時間」

平野 均 保健管理センター助教授「からだのリズムと心身の健康－冬季うつ病を中心に－」

中村彰治 医学研究科教授「ストレスと時間－脳に良いストレス、悪いストレス－」

やまぐち街なか大学 連続講座「時間学」

平成18年度前期5回 辻正二 時間学研究所長／一川誠 理工学研究科助教授／鎌田祥仁 時間学研究所助教授／青山拓央 時間学研究所講師／井上慎一 時間学研究所教授

平成18年度後期5回 石田成則 経済学部教授／川崎勝 医学部助教授／森野正弘 東アジア研究科助教授／松野浩嗣 理工学研究科教授／星野晋 医学研究科講師

8. 総合評価

各部門の評価を踏まえて、スペース、運営委員会の活動等の観点から時間学研究所の総合的な評価を記載してください。

18年度の研究は、4研究部門（「理論的時間研究部門」、「自然的時間研究部門」、「社会的時間研究部門」、「応用的時間研究部門」）に継続申請12件、新規申請3件の計15件の時間学研究プロジェクトを受理、審査の上承認した。

時間学研究が目指す時間の研究は、(1)時間の研究を通して学内外に新たな学際的研究を構築し、新たな時間学の可能性を示唆すること、(2)時間学研究所の研究の成果を社会に還元することにある。

(1)の研究：

18年度は、研究推進のために雑誌発行、セミナー開催などを企画、実施したので「時間学（文理融合的な）」研究の実績は進展した。各部門の研究実績は、4部門に記載されている通りである。どの部門とも研究業績、外部資金の導入、特許取得等に関して年度計画以上の成果を出しているところが増加した。4部門とも研究の成果が着実に生まれつつあり、特に、「応用的時間研究部門」の長篤志工学部プロジェクトグループの成果が注目される。他に青山拓央時間学研究所講師が「石本賞」（日本科学哲学会主催）を受賞し、井上慎一研究所教授の『やわらかな生命の時間』（秀和システム）と一川誠 理工学研究科助教授／時間学研究所応用時間学部門長の『大人になると、なぜ1年が短くなるのか?』（宝島社）が刊行され、時間学の研究成果が結実した。

その他、研究所として研究活動の推進ないし支援の一貫として「時間学セミナー」を始動させた。このセミナーは文理融合を目指す研究所の性格として研究者間の知的連携を計る目的をもつ。年間で4回、14名の発表者による研究成果が披露された。その他、専門研究の推進のための「特別セミナー」も2回実施した。

(2)の活動：

『心と時間』と題した時間学研究所の主催の学術講演会では、うつ病など心の問題に時間の視点の意義を伝え、同時に参加者との対話をすることができたし、山口市の「街なか大学」における連続講座「時間学」（前期・後期開講）では、時間学の構築という話題で1年化の講義をおこなった。それ以外にも個々の研究者によって多数の講演がなされ、社会貢献活動としては、十分な成果は挙げていると考える。

以上、(1)、(2)の実績からすると、18年度実績を総合的に評価すれば、「優秀な水準にある」ということが出来ると思われる。

しかし、今後、研究拠点になるためには、国際的研究拠点体制の整備が欠かせない。その準備として時間学研究の研究者養成のために若手の研究者の支援が必要であろう。19年度には研究成果を社会貢献として講演やセミナーをするだけでなく、共通教育など教育面で時間学の成果を伝える作業も必要であろう。それから山口大学時間学研究所が「時間学」の研究拠点になるためには、何よりもパラダイムとして確立させることが急務である。次年度には、時間学のテキストを刊行することも課題となろう。

この研究活動成果報告書に関しては、時間学研究所の自己点検・自己評価委員会、さらには時間学研究所の実績評価に関しては外部評価委員会によって評価を受ける予定である。